福井大学学術協定校への派遣留学（交換留学）月例報告書　４月分

国際地域学部３年　高橋大輔

留学派遣先：ヴィリニュス大学，リトアニア

時代の呼び方が変わったところで毎日の生活には何も大きな変化は無いのですが、「新しい時代」というだけで口元が緩んで笑顔がこぼれました。

【ウジュピス共和国】

ウジュピス共和国とはリトアニアの首都ヴィリニュス市内に存在する、勝手に独立して勝手に国旗や通貨、憲法まで作った共和国（自称）です。敷地は非常に狭く、148 エーカー（学生寮から大学までの徒歩 30 分圏内）ですが、国内にはおよそ 6000 人の一般人と 1000 人のアーティスト達が生活しています。国連から正式に認められている国ではないので出入りは自由です。1997 年 4 月 1 日にリトアニアから独立を果たしたらしく、今でもエイプリルフールである 4 月 1 日になるとその日だけパスポートにスタンプを押してもらうことができ、またその日だけウジュピス国内でのみ使用可能な紙幣も購入可能です。ヴィリニュスの古風な街並みとはうって変わり、ウジュピス国内には沢山のユーモア溢れる前衛的なアートを見ることができます。さらに憲法に関して面白いのが、ウジュピス共和国の憲法はおよそ 30 の言語に翻訳されており、その翻訳された憲法が壁に一続きで張り巡らされています。実は 2018 年の 12 月に日本語訳も完成しました。このように、独特の世界観が漂うウジュピス共和国はその地域一帯が古き街並みを重んじるヴィリニュス市内におけるひとつの大きなインスタレーションとなっています。ちなみにウジュピス共和国には大統領・内閣・10 人以上の退役軍人からなる軍隊が存在します。

私の住む学生寮はウジュピス国内に位置します。

【イタリア】

リトアニアにおけるイースターホリデーは 4 月 14 日～4 月 21 日の一週間でした。そこで私はイタリアをヴェネツィア→フィレンツェ→ローマ→ナポリの順にまわることにしました。ヴェネツィアでは私と同じくリトアニアに留学している友人と行動を共にして、その後のナポリまでは一人でまわっていました。この旅では、以下記載した内容の他にも観光地で写真を撮ることの意義や海外に修学や観光に訪れることの意味について考えていました。

【ヴェネツィア】

よく映画やアニメの舞台として描かれる水の都ヴェネツィアは「これぞ観光都市」と叫びたくなるほど、他の観光地とは一線を画した世界でした。ヴェネツィアはいくつかの島から成り立っているのですが、特に本島から少し離れたブラーノ島という場所は異色を放つカラフルな街並みで有名です。実を言うと、カラフルな建物自体はイタリアにある別の都市や以前訪れたポーランドでも見られたのでヨーロッパでは普通のことなのかもしれません。しかし、このブラーノ島はその中でもさらに色彩がはっきりとしていて、それに加えて水の都ヴェネツィアに位置しているということから他との差別化が明確になっている印象を受けました。少し話が脱線しますが、まるで「ただ英語ができるだけでは生きていけないから、英語のレベルをもっと高めて、さらに他の専門分野を見つけろ」と言われているような感覚でした。

【フィレンツェ】

芸術の街として知られるフィレンツェにはブルネレスキの代表作の一つであるサンタマリアデルフィオーレ大聖堂、ルネサンス期の絵画などが多数展示されたウフィツィ美術館、ミケランジェロのダビデ像を有するアカデミア美術館など多くの観光名所があるのですが、驚くのはそれらすべてが多くの人にとって徒歩圏内にあるというところです。

見知らぬ土地を観光していると、公共交通手段の使い方が全くわからず、さらに Wi-Fi の無い環境下では途方に暮れるような場面がよくあります。イタリアでは切符を購入後、券売機とは別の場所にある専用の機械に切符を差し込んでヴィッと音がしてからようやく電車に乗る権利が得られます。友人の話によると、その事実を知らなかった友達が切符を買ったにもかかわらずアクティベートしていなかったというだけで罰金 40 ユーロ（約 5000 円）を支払わせられたようです。「これくらい英語表記も記号も付けておけば観光客も安心だろう」ということは一切無くて、「どうすれば異国の地に来た人にとって分かりやすくて安心できるシステムを作るのか」を考えなければいけないのだと考えました。その点、観光名所がコンパクトに集まったフィレンツェは観光客に優しい街構造だと思います。

ところで、道を歩いているとサンタマリアデルフィオーレ大聖堂をはじめ巨大な建造物がそびえているのでふとそれらを見上げる機会も多いと思うのですが、注意しなければいけないことは、ときどき絵画を地面に置いて商売をしている人がいるので、間違って踏んでしまうと言い値で弁

償させられるかもしれません。また、スマホで写真を撮っているときに、絵画の商売人と手を組んだ誰かにぶつかられて絵画を踏まされる可能性もゼロとは言えないので気をつければいけないなと思いました。

【ローマ】

フィレンツェにある観光名所の多くが屋内を楽しむものであるのに対して、ローマにはコロッセウム、トレビの泉、スペイン広場など、屋外でも楽しめる観光名所も多い印象を持ちました。そしてこういった場所ではよくアジア系の男たちが通行人にサングラスや自撮り棒、ペットボトルの水を売ろうと声をかけている姿をよく見かけます。私もコロッセウムの周辺を歩いていたときに声をかけられました。よく日本人が観光に来るためか、彼らの中には日本語が堪能な人もいて、愚かなことに私はつい足を止めてしまいました。するとその男は巧みな会話を織り込みながら私の手首に赤・白・緑の紐を巻き付けようとしてきました。そのときは何とか振りほどいて逃げたのですが、もしあのまま巻き付けられていたらどうなったのか少し気になるところではあります。

ローマには他にキリスト教カトリックの総本山であるバチカン市国があり、中ではサンピエトロ大聖堂やバチカン美術館をめぐることができます。そしてバチカン市国内にも、例のアジア系の男たちが通行人に声をかけていました。ただコロッセウムにいた男たちと少し違う点として、彼らはフォーマルなスーツを着て首に ID カードのようなものをぶら下げて、自撮り棒などではなくパンフレットのようなものを持っていました。実際、私が大聖堂の敷地の外でチケット売り場を探していると声をかけられ「チケット売り場はあっちだよ」や「バチカン市国内を見て回るならガイドは必要だよ」などのように、よくいる一般スタッフとして観光案内をしていました。恐らく、バチカン市国が正式に彼らを雇っているのだろうと思いました。ただサンピエトロ大聖堂の前には見たことのない行列があったので、諦めてバチカン美術館だけを見ようと思い、彼らの誘いを断って美術館の方に向かいました。そして到着すると、同様にフォーマルな姿をしたアジア系のスタッフが、「既にオンラインでチケットを入手しましたか？」と尋ねてきました。彼らによると美術館までの列は２時間待ちらしいのですが、近くにある特設のチケット売り場でチケットを予約購入すると、整理券のように待ち時間がほぼゼロで入場できると説明してくれました。料金は大人 54 ユーロほどで、学生は 24 ユーロでした。少し怪しいなと感じました。それに時間もあったので、その場でチケットは買わずに２時間待つことにしました。10 分後、美術館に入ってチケットを 8 ユーロで購入しました。キリスト教徒ではありませんが、ミケランジェロの作品“最後の審判”をこの目で見ることができて良かったです。

【ナポリ】

ピザ発祥の地とされるナポリには福井大学から友人が交換留学をしていたので、滞在中は彼の部屋に泊めてもらいました。このナポリ滞在はピザとその交換留学中の彼がどのような留学生活を送っているのかを探るのが目的でした。滞在中はその友人と海まで散歩をしたり、人生で最高のピザを食べたり、留学に対する思いやこれまでの生活について話をしました。その間、彼の英語を耳にすることはなく、彼は現地の人達とイタリア語で会話をしていました。大学の授業ですら見たこともないイタリア語を話すその格好良さもさることながら、彼と現地の人との会話がとても楽しそうでなりませんでした。しかし留学当初は彼にも、現地語を全く勉強しなかった私には分からない、現地語を頑張って勉強してきたからこそ味わう彼なりの葛藤やそれを乗り越えるための更なる努力や信念があったという話を聴いて、自分ももっと頑張らなければいけないと強く感じました。様々な都合によって彼のイタリア留学が半年間に縮まってしまったことに対する残念な気持ちはありますが、彼ならば日本に帰った後も自身の留学生活で得た能力や感性を最大限活かしつつ、日本におけるイタリア語の最前線を探して頑張っていけると信じています。

【三つの十字架の丘】

これまでリトアニアの十字架の丘やイタリアのバチカン美術館に行ってきましたが、こうしたキリスト教に関連する場所に行く度に、「仏教ですらまともに信仰しているとは言えないような自分がキリスト教の聖地に入ってもいいのだろうか」と私は考えていました。しかし、ナポリに留学している友人の話を聞くと、彼は留学当初よく近くの教会に行っていたようです。何故かは分かりませんがそれ以来「自分でもキリスト教の聖地に行ってもいいのか」と考えるようになり、最近では散歩も兼ねて毎日“三つの十字架の丘”に登るようにしています。ただの時間の無駄のような気もするかもしれませんが、何も考えない時間、運動をする時間、屋外で軽く勉強をする時間、異国の人々の暮らしを眺める時間と考えてこれからも続けていこうと思います。